

青山和佳：[書評] ケアはつらいよ——語ること、語り続けることの意味——  
[コメント]

---

## 萌芽のケア：青山さんの書評に寄せて

ムン  
文

キョンナミ  
景楠

未知の専門領域を探究する未読の論文集を扱った書評に短いコメントを付す——このようなやや回りくどい（あるいは、怖いもの知らずの）状況が、ここで私に生じています。内容に踏み込んだ話は当然できませんので、ここでは書評のなかから印象深い言葉を一つだけ取り上げ、それをもとに少し回り道をしてみたいと思います。その言葉とは、市場の力の力を認めながらも、ケアがそれに呑み込まれてしまうことに抗おうとする青山さんの気持ちを反映していると思われる「萌芽性を保つ」という表現です。

「萌芽」という語はおそらく両義的な意味合いをもつと思います。それは、あらゆる希望的な可能性を込めたものでもあります。結局は何にもならないものであることも珍しくないからです。ここから、萌芽を語る際に生じる二つの視点の乖離を見て取ることができるかも知れません。ある人は萌芽のもつ可能性に、ある人はそれから生まれてくる実りに目を向けます。

面白いのは、私にはどちらも間違っているようには思えないという点です。多くの場合、前者の人もそれがなんらかの形をもった実りをなすことを願っており、後者の人も形になっていない萌芽を潰そうという気持ちをもってはいません。擦れ違いが生じるのは、互いに対して読み込むべきではない前提を読み込むとき、つまり「相手は萌芽を保つことを全面的に否定している」とか、「萌芽を実りへと移そうとせず純粋に萌芽のままで保とうとしている」といった前提を忍ばせるときです。（念のためですが、ここで分けた二つの視点は、青山さんの書評に登場する特定の立場を念頭においたものではなく、単に書評中の言葉に触発されて出てきた私の思いつきです。私が述べている対立は、たとえば数値で計れるか否かといった基準に関してはなにも主張していません。）

このように誤った前提を読み込むことを控えれば、二つの視点の間に論

理的な矛盾はないと思います。では、ここにあるのはいったいどのような対立なのでしょう——とここまできて、今のところ学者として自分がしていきたいのは、こういった「言葉や概念に対するケア」なのではないか、という考えが浮かんできました。それを踏まえたくて私が一つ恐れているのは、こういうことを言い出す自分はあまり優しそうな人には思われないだろうな、という（個人的に少々残念な）予感が実ってしまうことです。とはいえ、ここは全うするしかありません。